

沖縄をめぐる 柏崎栄助のデザインと言葉

沖縄にて

1928年に訪れて以来、柏崎にとって沖縄は常に重要な地でした。美術学校入学後も、郷里にはあまり帰らず、休暇になれば生駒の元を訪ね、沖縄の各地を隈なく巡り、離島や無人島まで足を運んだと言います。在学中も生駒のもとでデザインに取り組み、ヨーロッパ遊学から帰国してからもフリーの図案家（デザイナー）として紅房で活動を続けます。この頃、柏崎は紅房の店内デザインも手掛けており、アダンの葉で編まれた店頭のみさしに、荷造り紐が巻き付けられた店内の柱やテーブル、芭蕉布で仕上げられた丸椅子の洗練された店舗は多く人の目を驚かせたようです。

そして、1940年、東京・銀座の資生堂で「沖縄紅房展」が開催され好評を博します。紅房漆器の声価が高まり、デザイナー・柏崎の名が世に知れ渡った、まさしく紅房の最盛期です。しかし、それも長くは続きませんでした。戦時体制に向かいつつある中、漆の配給はだんだんと厳しさを増し、漆器は贅沢品と見なされるようになります。紅房の活動も縮小を余儀なくされていきます。この頃の柏崎と紅房の関係は不明なところが多く、両者が再び交わるのは、戦後、沖縄のアメリカ統治時代となります。

戦争で壊滅状態になった沖縄の漆器産業でしたが、戦後、職人たちは那覇に戻りつつあり、1947年に紅房も再建されます。新しい組織として出発した紅房は、アメリカ軍人や軍属向けの土産物、記念品なども手掛けていきますが、次第に低品質化が問題となり、柏崎や生駒が再び関わるようになります。沖縄の緋の文様などを取り入れた螺鈿の手箱やオルゴール箱はこの時期に柏崎が監修したものと考えられます。紅房には柏崎の助言が記された指示書が残されており、需要とデザインの洗練を両立しようとした柏崎の姿が垣間見えます。

戦前・戦後を通じて柏崎は沖縄と深く関わり続けていましたが、それは「紅房」で生み出されたデザインだけではなく、柏崎が残した書簡や日記にもうかがわれます。柏崎は、毎年、夏の台風シーズンに、沖縄の離島へと旅していました。まるで生きる限界に挑むような旅で記した言葉は、柏崎の没後、『沖縄日記』として編集され、出版されました。「何んで、この島に来るためにこんなにまで苦しい旅を続けるのか解らない。ただ、ひたすらに人間が生きる姿を追い求めて来たただけだ」と柏崎は記します。生の根源を見つめ、綴られる珠玉の言葉は、沖縄をめぐる柏崎のもう一つの作品群とも言えるでしょう。